



朝鮮通信使の来日(10)

『第十回・寛延元年(一七四八)通信使』

齋藤弘征

第九代將軍家重

第八代將軍吉宗は、延享二年(一七四五)九月に老齡のため引退し、跡を家重が継ぎました。翌年八月には幕府から対馬藩宗義如に対し、「御代替二付朝鮮人來聘」交渉の指示が出されました。これに対し朝鮮王府からは、翌年三月使行との同意の通知がありました。

この時期、対馬はといえば、享保十七年(一七三二)に府中大火が起り、一二九九戸が焼失しました。幕府からは一万石の救援があり、朝鮮王府からも「島民飢餓、前例有り」として対馬藩の要請を待たず給米が贈られました。

副使船炎上

二月二十一日夜半、鰐浦で風待ちをする信使船に大惨事が発生しました。副使船が炎上したのです。その様子を「使行録」は、「忽ち騒がしい声が船を着けて置いた近所から聞こえてきたが、その声が恰も鳥、雀が啼き囀るようである。…船の中の火は既に消すことができなかつた。器械、什物は何れも皆炎を助長する物ばかりで猛烈な炎が空中に揚るのて人が近くに行けなかつた。我が国の人達は周章狼狽して奔走したが、敢えて一臂(片腕)の力も尽くすことが出来なくて、右往左往しており一握りの水で車に載せた薪に付いた火を消そうとする者はただ護行する日本人達であつた。…船に入つて行き、宿つた裨将(副将)、員役たちが水に身を投じたり、傍らの船に飛び下りたり或いは網を伝わつて下りて來

て、死中に生を求めて骨が折れ皮膚を傷つけて、船中に居た凡ての人を点検し、順番に名を呼ぶと、左水宮の小使一名と、昌原の樂工一名が其の中で焼死した」と述べています。

結局、副使一行の上下客員の所持品と、人参その他の礼物は何一つ取り出すことはできず、全て焼失してしまいました。一行は対馬藩の船を一隻借りて鰐浦を出航しました。

府中異聞

信使たちが府中滞在中、市中で得た当時の人々の生活様式を「使行録」は記しています。市ヶ峰(測候所のあつた所)の時鐘堂に万松院から移された旧清玄寺の梵鐘(現在重要文化財指定)が懸けられ、市中に時を告げていましたが、それぞれの時刻にこの鐘を撞く回数記されています。それによると、卯・酉(午前・午後六時)六つ、辰・戌(同八時)五つ、巳・亥(同十時)四つ、子・午(同零時)九つ、申・丑(午後・午前二時)八つ、寅・申(午前・午後四時)七つの回数記が撞かれていますと記録しています。

また食習慣について、島主が館所(西山寺)に届けた料理の中に鯨肉があり、「鯨肉が豚の脂肪層の如く白くあつさりしており、日本人は国中の第一の美味しい食べ物としてゐる」、また、「対馬の日本人の風習として、大きな宴会には必ず鯨肉を準備して、牛・羊を料理しないが、今般は使行のために牛の肉を料理して供応する」ともみえ、藩が使臣たちの食材に気を使つてゐることがうかがえます。

芳浦(芦ヶ浦)でのこと

六月一日江戸城で朝鮮国書を伝達し、家重返翰も受け国任を果たした通信使一行は、帰路芳浦(芦ヶ浦)で不順な天候のため、十六日間ほど足留めされ

ました。この間一行は近くの自然を楽しんでいます。「使行録」によると、「時に船頭と船夫の中に泳ぐ者をして、目の前で海鼠と鮑を採つて来させ、書記、裨将達を呼んで分け与えて一緒に食べた。また見ると、船首の石の上に牡蠣貝が此処彼処に付着していた。船中の諸人及び小童達が手で採つて食べているが、その味が倍くらい美味しいという。斯かる海の風景は、滞留している人の鬱積した心を優に宥めるのにまた一助となる。竹を燃やして炊飯。裁判(対馬藩役人)に魚網を持って来させ、小さい魚を捕つて刺身にして分けて食べる。海を渡つた後の一番興味ある事と言へる」と述べ、豊かな芦ヶ浦の自然の中の野宴を楽しんでいます。

雨森芳洲

使臣たちは棧原屋形での藩主饗応に向かう途中、雨森芳洲を見かけています。「使行録」に、「島の中に雨森東なる者が居て、号は芳洲であるが詩文を能くし、三国(中国・朝鮮・日本)の言葉をよく解し、白石源興(げんよ・新井白石)と同門である。今は年老いて家に退いてはいるが、文簿に係する島内の事は今でも皆参与している。今般島主の宴会に参席のため府中に赴く時に、道が雨森東の家の前を通るようになったが、門内に立つた彼を見たが身の丈が殆ど七尺になり、顔は肉付きがよくて、長く島の夷狄(野蛮な民族を指す)の中の偉人というに足りる」と述べています。七尺はともかく、芳洲はかなり長身だった様です。

芳洲はこの時八十一歳で、「古今和歌集」千遍読みと、和歌一万首詠草を志していた頃です。畏友陶山訥庵は、この世を去つてから十六年が経っていました。(さいとつひろゆき・対馬市文化財保護審議会委員)